

第7回JLPP翻訳コンクール 仏語部門講評

東京大学名誉教授、放送大学教養学部教授
野崎 歓

今回、嬉しい驚きだったのは、117件という応募数の多さである（最終的に審査対象となったのは99件）。日本文学のフランス語に挑戦しようという人たちの数が前回と比べ各段に増えた。本審査に残った候補作のレベルが非常に高かったのは、それと連動した事態なのだろう。同じテキストを訳しているのに、こんなに多様なアプローチ、豊かな表現の可能性があるのかと改めて感心させられることしきりだった。

審査の際に頭をよぎったのは、ジャン・ルノワール監督の往年の傑作『ゲームの規則』に出てくる名ゼリふだった。「この世で恐ろしいのは、だれにでもそれぞれの道理があるということさ」というのだが、むろん単に恐ろしいとってすませるわけにはいかない。候補作が互いに示しあう差異に順列をつけ、受賞作を決定しなければならない。

今回の課題は川上弘美の短篇小説「夏休み」、および保坂和志のエッセイ「言葉の外へ——文庫まえがき」だった。いずれも現代を代表する作家たちである。日本文学の言葉に、ある種の「カジュアル」な風通しのいい表現をもたらした作家たちと位置づけることができるのではないだろうか。とりわけ、川上の小説は、やわらかく気取りのない文章で綴られていて、どんな読者にとっても読みやすく親しみやすい。だから翻訳しやすいかといえばまったくそうではない。多くの候補の訳が、フランス語としては申し分なく立派だが、川上作品のタッチとはいささか離れてしまっているように感じられた。「単純過去」で訳したものがいくつもあったが、「文章語」のための単純過去を使用することで、しゃちこぼった古典的作品になってしまった印象があった。とはいえ、より日常会話に即した「複合過去」を用いさえすればいいかという、文学作品としての説得力をもたせるのには工夫が必要だろう。さらには、語り手を男性として訳した例も散見したが、日本の読者にとって川上作品は明らかに「女性」による語りとして受け止められる。

一見シンプルきわまりない川上作品が提起するそれら意外な難点を、アケレール樹里 (Julie Ackerer) 氏の訳はすべてクリアし、魅力的なのびやかさを生み出していて唸らされた。一方、保坂作品については、奔放に展開される思考のゆくえを的確にとらえ、堅苦しくないフランス語に落とし込むわざが要求される。そうした取り組みにおいてもアケレール樹里氏の訳稿は申し分のないものと感じられた。ハラルド・ウェンドラー (Harald Wendler)、ジェラルディンヌ・ウダ (Géraldine Oudin) 両氏の翻訳もまた、ハードルを見事に飛び越えて魅力的なフランス語表現に到達し

ている。だれにでも「道理」がある翻訳の世界とはいえ、そこには明確な卓越もまた厳然として存在するのだと、三人の訳文は示してくれた。